

モラロジーの課題と展望
ー多文化共生(複文化主義)の視点からー

研究員 アブドゥラシィティ・アブドゥラティフ

〈要旨〉

モラロジーとは、廣池千九郎により体系化された道徳科学であり、個人の修養と社会の秩序維持を目的とする実践的倫理思想である。本発表では、多文化・多宗教社会になりつつある日本において、多文化共生の視点からモラロジーの課題と展望を検討した。日本におけるモラロジー活動は、普遍性を志向する一方、日本的価値観（家族中心主義、祖先崇拜など）に依拠するため、日本に在住する異なる文化や宗教的背景をもつ人々への普遍性や包摂性に課題があることを指摘した。

複文化主義の視点からは、文化相対主義との緊張や、宗教的道徳との整合性についての問題点を整理しながら、イスラーム倫理との比較を通じて、道徳の根拠や実践規範の差異と共通点を明らかにし、共生の対話や価値の相互補完の可能性につながるとしている。特に、宗教的倫理と非宗教的道徳との接点を見出し、道徳教育における実践的統合を提案している。今後の課題としては、多文化共生における「より深い人間理解と共生の道を追求するための重要な指針」を考えると共に、モラロジーは文化的多様性を包摂しうる「生きた実践的知恵」として再定義されるべきであり、共通倫理基盤の再構築を通じた「対話型モラロジー」への転換が求められると述べた。